

「キャンパス・アジア」モニタリング

モニタリング報告書

大学名	一橋大学	
取組学部・研究科等名	大学院国際企業戦略研究科	
構想名称	アジア・ビジネスリーダー・プログラム	
海外の相手大学	【中国】	北京大学光華管理学院
	【韓国】	ソウル国立大学校経営学部・経営専門大学院

平成26年1月

独立行政法人大学評価・学位授与機構
「キャンパス・アジア」モニタリング委員会

「キャンパス・アジア」モニタリング報告書について

「キャンパス・アジア」のモニタリングは、日中韓質保証機関協議会*¹が実施するプロジェクトで、「キャンパス・アジア」パイロットプログラム*²をケース・スタディとして取り上げ、プログラムの優良事例を抽出しながら、国際的に連携した教育を展開するうえで「保証すべき質」についてより明確にし、3か国間で共通の質保証機関のガイドラインを作成することを目指しています。

モニタリングでは、プログラムの最低限の質を確認するような評価ではなく、国際的に連携したプログラムの現状や質向上にかかる活動を把握・確認し、**教育の質の観点から優良事例を抽出して、それらを国内外に広く発信していくことを目的**としています。

「キャンパス・アジア」パイロットプログラムは、2011年に開始され、5年間のプログラムとして採択されています。その間において、日中韓質保証機関協議会は、モニタリングを2回実施することとしています。1回目のモニタリングは、日中韓各国における関連法規や評価制度・手法を踏まえて、各国が個別に実施することとしました。

パイロットプログラムの取組みは今年度で3年目を迎え、交流の動きも本格化しています。1回目のモニタリングでは、機構の「キャンパス・アジア」モニタリング委員会が定めたモニタリングの基準に基づき、各プログラム実施主体が平成24年度末までの取組みについて自己分析を行いました。この自己分析書に対して書面調査を行うとともに、訪問調査を通じて今年度（平成25年度）までの取組状況を聴取しました。

本報告書は、そのモニタリング結果をまとめたものです。なお、**優れた取組みの抽出**にあたっては、当該大学の自己分析書の文章をもとにし、説明に際して最低限必要な修正を加えました。

さらに、プログラムの今後一層の進展に資するため、**大学から今後の課題点を記載していただき、それに対するモニタリング実施側からのコメントを付記**して、本報告書に掲載しました。なお、このコメントは、モニタリング委員・専門委員の立場からのもので、モニタリング委員会全体の意見を代表するものではありません。

※本報告書の形式について

基準1から4の各基準毎に、「取組みの特徴」の後に、「抽出した優れた取組み」を枠内（）に示し、その理由を付しています。

なお、本報告書の電子版およびモニタリングの基準やプロセスをまとめた「『キャンパス・アジア』モニタリングハンドブック」の電子版は、大学評価・学位授与機構ウェブサイト (http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/jkcouncil/campusasia_monitoring.html) をご覧ください。

*1： 大学評価・学位授与機構、中国教育部高等教育教学評価センター（HEEC）、韓国大学教育協議会（KCUE）の3つの質保証機関から構成。

*2： 平成23年度大学の世界展開力強化事業タイプA-I：日中韓のトライアングル交流事業として採択された10のプログラム

<目 次>

I	モニタリング結果の概要	1
II	基準ごとのモニタリング結果	
	基準1 教育プログラムの目的	2
	基準2 教育の実施	
	基準2-1 実施体制	4
	基準2-2 教育内容・方法	7
	基準2-3 学習・生活支援	9
	基準2-4 単位互換・成績評価	11
	基準3 学習成果	13
	基準4 内部質保証システム	14

<付録>

採択プログラム実施主体から提出された自己分析書

I モニタリング結果の概要

総 括

本プログラムでは人材育成の目的を「東アジアが共に繁栄していくことに貢献する将来のビジネスリーダーを共同で教育する」と明確に定め、「BEST ビジネス・スクール提携協定」の形で文書化していると共に、各種の覚書等を締結して目的や方向性を共有しており、進展している。

実施体制としては、参加している3大学のすべてが英語のみによる学位授与を既に行っている経営専門大学院であるため、本プログラムにおいてもすべて英語で授業を行っており、事務職員も英語による対応が可能となっていることは進展している取組みである。教育内容・方法については、3つの種類のプログラムに取り組んで学生にさまざまな機会を提供し、特にその中の短期集中プログラムは学生が3か国を順に訪問して共同で学ぶものであり進展している。学習・生活支援では、教職員が英語によって支援を行う体制があり、宿舍と奨学金の完備もなされ、進展している。

内部質保証システムとしては、3大学の研究科とも国際的な認定を受けており、学生アンケートを効果的に実施し、教員へのフィードバックも適切に行われ、進展している。

優れた取組み

- 参加大学はすべて英語のみによる学位授与を行っている経営専門大学院であり、教員は全員英語で指導することを要求され、事務職員も英語による対応が可能である。また、全ての資料及び案内を英語で発信している。
- アジア・ビジネスリーダー・プログラム (ABLP) は、ダブル・ディグリー・プログラム、学期間交換留学プログラム、短期集中プログラムの3つのプログラムから成り立っている。短期集中プログラムでは、参加学生30名が北京、東京、ソウルの順番で共に授業を受け、各国の主要企業を訪問し、現役ビジネスリーダーの話を直接聞き、共にプロジェクトを担当するなどして2週間を過ごし、強い結束力と協力関係を築くことができている。

II 基準ごとのモニタリング結果

基準 1 教育プログラムの目的

海外大学との共同教育プログラムの目的が明確に定められ、参加大学の間で共有されているか。

取組みの特徴

本プログラムにおける人材育成の目的は明確であり、それが具体的に協定書の形で文書化されている。同じような性格を有する教育機関の連携として、各種の覚書を締結しており、目的や方向性を共有している。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

アジア・ビジネスリーダー・プログラム(ABLP)は、2011年11月に3大学間で締結されたBESTビジネス・スクール提携協定に基づいているため、2011年12月のプログラム開始以前から、3大学で非常に緊密な情報共有を行い、本プログラムの目的及び育成する人材像についての協議を行ってきた。各大学の研究科長及び担当教員で構成されるBESTビジネス・スクール提携協定の運営委員会は、1年に2回開催しており、今後も情報共有を密に実施する予定である。また、当初の2年に1回開催であった3大学間の会合「BESTシンポジウム」は2年に1回から、1年に1回開催に変更し、各大学の教員が共同で行っている協働研究の進捗報告と論文発表の機会を増やした。

(優れている理由)

3大学間で緊密な情報交換を行いながら、養成する人材像やプログラム設計について1年間の協議を行っており、プログラムについての理解が共有されている。シンポジウムにより、外部に公開する形で目的及び進捗を共有する取り組みは優れているとともに、教員のモチベーションの維持にも有効と思われる。

本プログラムで実施されているダブル・ディグリー・プログラム、学期間交換留学プログラム及び短期集中プログラムにおいて、「ダブル・ディグリー覚書」(ソウル国立大学校：2013年5月締結予定・北京大学：2012年12月締結)及び「学術・人物交流に関する協定書」(交流協定)(ソウル国立大学校：2007年7月締結・北京大学：2011年4月締結)を締結することにより、目的及び育成する人材を文書化し、更に明確なものとして共有できるように努めている。

(優れている理由)

共同教育プログラムの開発目的や育成する人材について、参加3大学間の「BESTビジネス・スクール提携協定」において文書化しており、この協定を基盤に、具体的なプログラムの覚書や協定書を整備して目的の共有化を図っていることは優れている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

現時点での一番の懸念は、中国政府の支援体制である。PKUの受入学生（ICS学生及びSNU学生）に対する奨学金の支給は決定したと同時に、PKUの派遣学生（PKU学生）への支援がされないことも決定した。短期集中プログラムは3大学で選抜された10名ずつの参加学生が共に行動するため、学生間で情報交換がされ、支援内容に差があることを知らされた学生間に不安が及んだ。この点はプログラム終了後、参加学生にコース内容の評価アンケートと感想を募った際に発覚し、早急にPKU担当者と話し合い、次回からはPKU参加学生に事前に周知することで解決した。しかし、中国政府の支援体制は今後も油断できない状況にあると考える。

※PKU：北京大学、ICS：一橋大学国際企業戦略研究科、SNU：ソウル国立大学校

○コメント

- ・ 中国政府の海外派遣学生の支援は、独自に体制が整備されつつあり、それとの整合性から本プログラムへの自国学生支援が見送られていることが想定される。
- ・ 各国政府による支援は、プログラムにとっては外部要因であり、効果的な対処は難しい。参加条件等の事前周知の徹底が当面の対応策であろうと考える。

基準 2 教育の実施

基準 2 - 1 実施体制

目的を達成するための体制が、参加大学等の中で適切に構築され、機能しているか。

取組みの特徴

参加大学間の協議・調整の基本的な体制や枠組みは BEST ビジネス・スクール提携によって整備されている。参加している 3 大学のすべてが英語のみによる学位授与を既に行っている経営専門大学院であるため、本プログラムにおいてもすべて英語で授業を行い、連携を容易にしている。事務職員も英語による対応が可能であり、留学生への支援体制が十分に整備されている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

本プログラムは BEST ビジネス・スクール提携協定をベースに、「ダブル・ディグリー覚書」及び「学術・人物交流に関する協定書」（交流協定）を締結しており、運営体制は明確になっている。また、日常的に参加大学間の担当者と E メールやビデオ会議などでの連絡を定期的実施、また、当初 2 年に 1 度としていた 3 大学間の会合「BEST シンポジウム」を毎年行うことに変更し、各大学の担当者全員が 1 年に 1 度は実際に集結して顔を合わせる機会を設け、運営方法や課題について協議する運営委員会を開催することとした。（ビデオ会議でも可としている。年 2 回のうち 1 回は顔を合わせ、もう 1 回はビデオ会議としている。）これにより、参加大学間での課題の共有や分担をより行いやすい体制を整えた。また、この際、各大学の教員が共同で行っている協働研究の論文発表の機会を設け、教員同士の研究交流の場としても活用している。

（優れている理由）

提携協定を締結し、各大学の研究科長および担当教員で構成される運営委員会を開催する体制が用意されているのは優れている。また、一橋大学大学院国際企業戦略研究科（ICS）では、本プログラム担当者は、研究科長と日常的に連絡をとって情報を共有しているとともに、研究科戦略会議において教員間での情報共有も図っている。運営委員会とあわせて、参加教員の協働の場を設定する取り組みは優れている。

学内においても、本学で留学生業務を取り扱っている学務部国際課と密に連携をとり、留学生への支援を行っている。3 大学は交換留学生の受け入れならびに海外への交換留学生の派遣に関して十分な経験を備えている。

（優れている理由）

一橋大学 ICS では本プログラムに限らず 7 割が外国人学生であり、留学生も通常の学生と共通した学生支援を受けられる体制を有しており、優れている。たとえば、就職支援の体制については国内の就職希望者はリクルート担当者がケアし、海外での就職希望者は Faculty スタッフが個別サポートを行っている。

参加大学はすべて英語のみによる学位授与を行っている経営専門大学院であり、教員は全員英語で指導することを要求され（日本語授業の各初級・中級・上級を除く）、事務職員も英語による対応が可能である。また、全ての資料及び案内を英語で発信している。

（優れている理由）

各大学の教員とプログラム・ディレクターは高い英語力をもって、すべて英語で授業を行っており、教材や学生向け各種資料は英語で作成されている。スタッフまですべてが英語で対応が可能であるという体制が全大学で整っているのは優れている。また、大学間の連携や共同での人材育成を容易にしている。

欧米のビジネス・スクールによりリードされているグローバリゼーション促進傾向に対応しつつ、そのノウハウをアジアでのビジネス教育にバランスよく活かし、アジア発信の世界的なビジネスリーダーの育成に役立っている。

（優れている理由）

ビジネス・スクールとして、欧米のグローバリゼーション促進傾向は、参加各大学の共通性の強化に役立っていることは想定でき、これがひとつのモデルを提供する可能性は重要と考えられる。ICS ではアジア発のビジネス・スクールとして、プログラムやカリキュラムをはじめとした新しいモデルの構築を目指しており、期待したい。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ ビジネス・スクールとして、欧米のビジネス・スクールのグローバリゼーション促進傾向に対して、それを活用しつつ、アジアの共通性をどう構築していくのか、その取り組みが本プログラムを通して試みられるならば、大いに期待したい。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

ABLP をさらに発展させるため、昨年度より開始した日本語授業に加え、中国語と韓国語を学べるような体制を整える必要がある。単位取得科目として実施するのが理想的と考える反面、履修学生数を満たせるかどうかという大きな課題で残る。

ダブル・ディグリー・プログラムに関し、SNU のダブル・ディグリー・プログラム開始時期が ICS より半年遅い1月であり、募集時期が9月～11月であり、結果発表が11月と ICS と大幅に異なる。ICS の学生が2年目の計画を立てるのは2月～4月であり、SNU のダブル・ディグリー・プログラムに参加を希望する学生は、11月まで結果を待たなければならない状況であった。これを回避するため、SNU には書類審査等を非公式で2月～4月に実施してもらい、選抜プロセスを特別に早めてもらうことで、SNU でのダブル・ディグリー・プログラムを ICS 学生が2年目の計画として選択肢にできるように交渉し、了承を得た。この調整に非常に時間を要し

[大学名：一橋大学]

たため、ダブル・ディグリー覚書締結時期が大幅に遅れた。(正式な捺印は現在 SNU 側で進行中。)したがって、募集期間を極端に短縮せざるを得なくなり、SNU から ICS へのダブル・ディグリー学生の募集が困難な状況である。

○コメント

- ・ 英語での人材育成が優れたモデルであるが、アジアのそれぞれの国の言葉を学ぶ機会が提供されることも、学生の勉強に余裕があれば、望ましいことである。
- ・ 既開講の中国語、韓国語のクラスがあれば、それを活用することで、問題は回避できるのではないか。
- ・ 学事暦の違いによるこのような課題の発生は、すべての同様のプログラムで発生する可能性があり、選抜を早めてもらうというのは一つの解決策として他の大学の参考になると思われる。

基準 2 - 2 教育内容・方法

目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同して検討され、実施されているか。

取組みの特徴

3つの種類のプログラムに取り組んでおり、学生にさまざまな機会を提供するという点で有効な取り組みである。特に、短期集中プログラムでは学生が3か国を順に訪問して共同で学ぶものであり、効果的であり意義深い。相手大学への学生派遣も順調に行われている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

ABLPは3つのプログラムから成り立っている。一つ目はダブル・ディグリー・プログラムである。第1回は今年度となり、参加学生がほぼ決定した。2つ目は学期間交換留学プログラムである。ICSからは昨年度、そして今年度も定員の2名ずつの派遣が決定している。昨年PKUに派遣した2名の学生は、ICS学生を代表し、PKUにて開催された「国際交流フェア (International Fair)」にてICS及びABLPの宣伝、周知をした。教員及び事務局の運営側だけではなく、実際に参加している学生の視点からのプレゼンテーションにPKUに集まった国際交流フェアの観客は非常に深く興味を示し、参加校44大学の中でICSは最も訪問学生が多かった。

3つ目は短期集中プログラムである。第1回の昨年度の夏期に開催された短期集中プログラム「Doing Business in Asia」では、GPAと参加希望学生によるエッセイ（なぜ当プログラムに参加を希望するか）により選抜された3大学の学生10名ずつが参加し、実際に北京、東京、ソウルの順番で共に授業を受け、各国の主要企業を訪問し、現役ビジネスリーダーの話を直接聞き、共にプロジェクトを担当するなどして2週間を過ごし、知識や体験を共有することによって短期間で絆を深め、強力な協力関係にあるアジアの次世代ビジネスリーダーのネットワーク作りに繋がった。第2回目の今年度は各国のモジュールを1日ずつ増やすことと、昨年度の経験や参加学生のフィードバックをもとに更に内容の充実を目指した。

(優れている理由)

ダブル・ディグリー・プログラム、学期間交換留学プログラム、それと短期集中プログラムの3つのプログラムから構成されており、学生の様々なニーズに即して異なる学習機会を提供しているという点で、優れている。短期集中プログラム「Doing Business in Asia」では3か国の学生が共に3か国を順番に訪問して授業や企業訪問を行うものであり、学生グループを3か国の学生による多様性 (diversity) を原則に構成して議論を促しているなど、その内容は良く練られており、参加学生の将来の人脈形成にも有効な取り組みである。また、派遣学生の選抜は計画どおりに行われている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

1つ目は、短期集中プログラムに関し、開催時期が夏休みであることと、現地での主要企業によるプログラム参加の協力が必要であるため、3大学の教員によるコミットメントが特に必須となる。昨年度の第1回は3大学間で大きく差が生じたことが参加学生のフィードバックに明確にあらわれた。ICSによる東京モジュールは群を抜いて好評であったが、3大学間が一貫して同レベルであることが重要であり、12月に行われた研究科長率いる運営委員会にて問題を提示し、議論した。次回の短期集中プログラムは、前年度よりさらに緊密に協議を繰り返し、準備を進めている。

2つ目は、ABLP卒業生のネットワーク（アルムナイ・ネットワーク）の管理体制の整備である。

○コメント

- ・ 中国の大学では学院長（ないし党書記等の指導部）のコミットが、プログラムの円滑な実施では不可欠であり、その意味でも研究科長が率いる運営委員会の機能が重要と考えられる。光華管理学院はとくに院長の権限が強大と聞くところから、運営委員会の役割は重要であり、運営委員会のプログラム管理権限の強化がポイントとなってくるであろう。
- ・ 卒業生のネットワーク構築はプログラムのインパクトを高めるためには必須であり、工夫して欲しい。学生の自主性をうまく引き出す仕組みについて工夫をお願いしたい。

基準 2－3 学習・生活支援

学生が適切に学べる環境を形成し、学習・生活面の支援を行っているか。

取組みの特徴

教員・職員が英語によって支援を行う体制を整備している。宿舎と奨学金の完備もなされており、学生の学習・生活への支援体制は整備されている。ABLP 参加学生には、参加するプログラムに応じて、3か国の各大学で事前のオリエンテーションが十分に行われている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

ICS は比較的小規模であるため、学生一人ひとりへの多方面のケアが可能になっている。事務職員も英語での対応が可能であり、全ての資料や案内を英語で発信している。また、キャリアサービスではセミナー・アドバイザーとともに外国人学生の就職サポートを行っており、PKU や SNU の ABLP 参加学生も必要に応じて ICS 学生と同じサポートが可能な体制を整えている。

(優れている理由)

一橋大学 ICS では学生の多くが外国人であり、これまで整備されてきた大学における留学生への支援体制がキャンパス・アジアにも適用されている。

教員、事務職員に加え、ICS では卒業生ネットワークが充実しており、ソーシャルネットワークを中心に実際に経験を積んできた卒業生が学生視点で現役学生へのサポートを随時行っている。

(優れている理由)

卒業生ネットワークによる現役学生サポートは、特色ある取組みである。

各大学事務担当から必要事項や履修可能授業項目の案内が送られ、学生による質問は全て各大学に配置されている担当事務員が英語で対応している。学期間交換留学生は ICS のキャンパス内にある宿泊施設が提供されている。引っ越しを希望する学生にはハウジングのサポートも適宜提供している。ICS では文部科学省によるヤング・リーダーズ・プログラムほか、多種の奨学金を準備しており、キャンパス・アジア以外の学生にも適宜奨学金の支給を実施してきた。

(優れている理由)

参加学生の履修指導が行われており、また、学期間交換留学に宿泊施設を提供（短期プログラムはホテル滞在、ダブル・ディグリー学生は大学の留学生宿舎を予定）しているなどの各種の生活支援が行われていることは優れている。また、派遣学生については、北京では一橋大学北京事務所、ソウルでは OB 会である如水会ソウル支部と連絡をとり、サポート体制を

[大学名：一橋大学]

構築していることが特徴である。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

基準 2 - 4 単位互換・成績評価

単位の取得や海外大学等との互換方法、成績評価の方法および海外大学等との互換方法が定められ、機能しているか。

取組みの特徴

単位認定や成績評価の手続きが整備されている。ダブル・ディグリーについては、ビジネス・スクールでは国際的に教育内容に共通性があるという基盤があり、それを前提としながら学位授与の要件や学生派遣の運用にあたって起こる問題を検討している。今後、成績評価の互換方式の検討などをさらに進めていただくことを期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

PKU または SNU への派遣学生は、派遣先の大学（PKU または SNU）にて各大学の方針に沿った成績評価が設定され、その成績を ICS に持ち帰り、全てが合格していることを確認したうえで、2年目の必修科目の一部を満たしたと見なされている。

（優れている理由）

相手大学の成績評価を、必修科目の一部を満たしたと認定するシステムが構築されていることは優れている。実際に、学期間交換留学では、海外の先方大学でなければ受けられない授業をなるべく履修させるようにしており、それゆえに日本の科目での読み替えが困難となる。そのため、ICS の4学期のうち1学期分のゼミ単位として読み替え、P（合格）およびNP（不合格）の2段階で認定している。

ダブル・ディグリープログラムの場合は、先方の基準を尊重し、先方がつけた成績をそのまま受け入れる方法をとっている。そのために、一橋大学 ICS の教員が学生や先方教員と密に連絡をとり、シラバスを見ながら派遣先で履修する授業についてアドバイスをおこなうとともに、派遣後も先方教員から学習の状況についての情報を提供してもらい、本人とも連絡をとる体制をとっていることは優れている。これらの枠組みを支える基盤として、MBA の分野ではコアで履修しなくてはいけない科目がどの国でもほぼ共通となっていることがあり、このような分野特性に基づく構築は他大学の参考となる。日中韓の参加大学はいずれでも1年目で卒業要件を満たせるようになっており、2年目にダブル・ディグリープログラムに応募して取得することを可能にしている。学位授与のためには、学生は各大学の修了要件単位数から、各国の法律等で定められた認定可能な単位数を減じた残りの単位数を取得することが求められる。北京大学では修士論文が要件であり、日本では修士論文ではなく「ナレッジレポート」を提出することが要件となっており、ダブル・ディグリー学生は両者の要件を満たすことが求められている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

ダブル・ディグリー・プログラムの開始に伴い、単位互換が発生する。単位互換や成績評価は明確であるものの、ICS のダブル・ディグリー学生（派遣）が PKU もしくは SNU で履修した授業と取得した単位を ICS に持ち帰った際、成績証明書にどのように記載するかなどの詳細は検討中。

○コメント

- ・ 単位互換はすでに交換留学でも発生するはずなので、記載などについてその方式を踏襲すれば問題はさほどないのではないかと。成績の記載は、成績評価の段階が異なるなど、他大学でも苦労をされており、ビジネス・スクールの場合にはどのような工夫がなされるのか、今後のモデルとして期待したい。
- ・ 単位互換と成績評価が明確であるとする、成績証明書の表記の課題はそれほど重大ではない。ダブル・ディグリー授与を重視するのか、それに加えて社会へのメッセージ性を考慮するのか、という視点から検討してみるかどうか。

基準3 学習成果

教育プログラムの目的に即して学習成果を測定する方法を設定し、成果が適切にあがっているか。

取組みの特徴

インターンシップや交換留学では学生がレポートを作成して3大学で共有していることや、インターンシップの派遣先からもフィードバックを得ている。ICSでは一定値以上のGPAを卒業要件としており、学生の授業評価も行っており、学習の程度を把握している。今後、成績評価における具体的な方法論の3か国による検討や擦り合わせがすすめられるとともに、個別単位ではなく、プログラムとして目指す人材像の育成が行えているのかという点から3大学で学習成果の測定の考え方について協議が行われることを期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 本プログラムならびに個別科目について、学習成果をいかに測定するかに関する具体的な検討が望ましい。とくに、受講者の成績評価に当たって、教育プログラムの目的がどの程度達成されているかという視点をより勘案する取り組みに期待したい。ビジネス・スクールではインターンシップは教育上きわめて重要であり、その成績評価をどう行うかは、大変議論が多いところであり期待したい。
- ・ 基準4に書かれているアンケートの実施も学習成果の測定に相当するものと考えられる。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント**○大学が指摘した課題**

ICS、PKU、SNUにおいて、相互の管理体制はABLP開始時よりあらゆる局面で密に協議を繰り返してきた結果、かなり改善されており、今後も更にプログラムの向上に努めるよう協力体制を整える。今後、ABLP参加学生の卒業生ネットワーク（アルムナイ・ネットワーク）の管理体制を整える必要がある。

○コメント

- ・ 学習成果の測定方法についてもより議論していただきたい。学生の意見、あるいは満足度についての情報が共有されることが、各大学間の連携や協議にも有効となるであろう。
- ・ 卒業生ネットワークは、学生の将来の人脈形成に向けてきわめて有意義である。

基準4 内部質保証システム

内部質保証や改善のための体系的な取組みが、参加大学との連携のもとで行われ、機能しているか。

取組みの特徴

3大学の各研究科はそれぞれに国際的な大学認定機関によって認定を受けている。学生アンケートが効果的に実施され、またその教員へのフィードバックも適切に行われている。今後、本プログラムの外部有識者による評価や、評価の外部公開などを検討していただきたい。また、相手大学と改善を協議するシステムとして、運営委員会が実質的に機能することが重要であり、より活動的となることを期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

本プログラムでは、すべての授業において、担当教員が学生の成績評価を行うのと同時に、学生が授業内容及び担当教員の評価アンケートを実施している。これは、ICSで以前から実施されている制度であり、平等性を保つために同日を期限とし、事務局に提出する。教員は学生による評価をもとに今後の授業内容の見直しを行い、より充実したコンテンツを提供できるように努めている。

(優れている理由)

ICSではコースごとにコース内容と担当教員について、学生による評価アンケートを行っており、授業内容の見直しやコンテンツの充実が図られることは、優れた取組みである。また、3大学の各研究科はそれぞれに国際的な大学認定機関によって認定を受けており、ICSは日本のABEST21、PKUは欧州のEQUIS、SNUは米国のAACSBから認定されている。

※ABEST21: *Alliance on Business Education and Scholarship for Tomorrow, a 21st century organization*

EQUIS: *EFMD (European Foundation for Management Development) Quality Improvement System*

AACSB: *Association to Advance Collegiate Schools of Business*

短期集中プログラムで参加学生より集められたフィードバックを元に、11月の北京大学でのミーティングでは事務担当レベルで、また12月の運営委員会では研究科長率いる担当教員も全員で協議し、各モジュールでの反省を踏まえ、次回以降に活かせる改善点や今回好評であり更に活かせる点などについて論議をした。

(優れている理由)

学生アンケート等のフィードバックは、システムの改善には重要であり、それを各レベルの協議で共有することは意味のあることと思われる。実際に、第1回目の結果から、3か国の実施順序の変更や実施期間の延長を行い、教育内容については、アジアをテーマに、共有するビジネス課題と各国における部分とを明確にするなどの変更を行っている。キャンパ

ス・アジアに先立って5年前にスタートした Best Alliance のもとに、密接な関係が既に構築されていることが貢献しており、他大学の参考となる。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

3大学はそれぞれ内部質保証システムが整っていると述べている。

○コメント

- ・ 運営委員会の協議を通して、相手大学の内部質保証システムについて、より検証を進めることが必要ではなかろうか。特に光華管理学院は、カリキュラム等が米国から導入された経緯があると聞くところから、学生からのフィードバック等、常に質の検証を行うことが重要と考える。
- ・ 全学的なプログラムであるので、各大学・研究科の内部質保証制度が適用されていると理解した。今後もさらに各種プログラムとしての内部質保証に尽力されたい。